

平和について、 ぼくができること

第三小学校 六年

大 嶽 聡 太

ぼくは、平和作文を書こうと思ったけれど、何を書いていいのか、平和って何なのかわかりませんでした。だから、国語辞典で、平和の意味を調べてみました。意味は、①おだやかで、無事なこと。②戦争がなく、世の中が無事に治まっていること。と書いてありました。戦争と聞いて六年生の国語で『フリードルとテレジンの小さな画家たち』を勉強したことを思い出しました。

その内容は、第二次世界大戦でユダヤ人のフリードルがチェコのテレジン収容所で絵をかくことが子供たちの生きる力になると確信して、ドイツ兵からかくれて命がけで絵を教えたという内容でした。

勉強した時に、おどろいたことが二つありました。一つ目は、収容所では子供たちが朝から晩まで働かされていたことです。二つ目はユダヤ人から名前をうばい番号でよんで人として認められていなかったことです。ぼくはテレジン収容所について調べてみることにしました。

『絵画記録テレジン収容所』の本に教科書にはのっていないたくさんの絵や詩がありました。他にも有刺鉄線や科学実験させられたガリガリにやせている子供たちの写真や、殺されてしまったたくさんの人

が地面に並んでいる写真がのっていました。それから『アンネ・フランク』の本の中に、ユダヤ人がうでに番号の入れずみを入れている場面がありました。

ぼくは、今まで、何も知りませんでした。六〇〇万人のユダヤ人が殺されたこと。ふつうの女の子がドイツ兵に見つかからないように命がけでかくれ家に住んでいたこと。ユダヤ人というだけで人格や尊厳が失われて差別や偏見を受けていたこと。日本も戦争中、どくガス島にどくガス工場があったこと。ぼくは何も知りませんでした。ぼくはこのことを知って、おどろいたし、こわいと思いました。それから不思議にも思いました。どうして、たくさん人が、殺されたり、差別されてひどい目にあっていたのか。

最近ニュースでSDGsという言葉聞きます。その中に『平和と公正をすべての人に』というゴールがあります。ゴールということはまだ達成できていないということで、まだ世界は平和で安全ではないということだと思います。平和で安全な世界にするために、今のぼくができることは、肌の色のちがいや文化のちがいで差別したり偏見をもたないようにすること。戦争の歴史をもたないようにすること。戦争の歴史をもっと勉強したり知ったりすることだと思います。

曾祖母の弟が 残してくれた手紙

第三小学校 六年

川口 和奏

私は、四年生まで、戦争や平和なんて考えたこともありませんでした。ですが、五年生や六年生の社会の学習などを通して、戦争や平和について考えるようになっていきました。

戦争についてもっと知ろうと、母に聞いたところ、私の曾祖母の弟が戦争を体験していると知りました。そこで、祖母に電話をしてくわしい話を聞くと、曾祖母の弟が戦争で亡くなる前に残してくれた手紙があるとわかりました。

それから数日後、その手紙が届きました。そこに書いてある文字は難しい字ばかりで読めませんでした。ですが、その手紙からは、これから戦争で亡くなるかもしれないのに自信に満ちていると分かりました。祖母が、どんなことが書いてあるのかを別の手紙に書いてくれてありました。

曾祖母の弟からの手紙は三枚あり、戦争に行く前に書いたもの、戦場に着くまでの飛行機で書いたものに分かれていました。

曾祖母の弟はサイパン島という所で戦死したそうです。手紙には「昭和十九年七月の戦いが一番大変だった。遠くはなれたふるりの母親、

他家族を心配している。国のために戦争に出かけ、東南アジア諸島の一角、サイパン島で戦います。」と書かれています。この先は分かりませんが、自分のことより母親や家族を心配する気持ちは勇敢で優しいと思いました。

昭和二十年八月十五日、日本はアメリカに負け、終戦をむかえました。しかし、しばらくは生死の連絡がとれず、戦死したと分かるまで時間がかかったそうです。この時の曾祖母はとても不安だったと思います。

戦争に行った人たちは、命がけで本当に大変な思いをし、戦ったのだと思います。国のために命をかけて戦い、遠くはなれた家族を思う気持ちは、とても心にささります。こんな思いを、苦しみを、もう絶対におこしたくないです。平和な世界、社会にしようと、各地で行事が行われています。いつか、家族や祖母と一緒に、曾祖母の弟のように国のために戦ってくれた人々のお参りに、静岡の護国神社や靖国神社へ行きたいです。

今、趣味にぼつとうできたり、安全に楽しく、毎日を家族みんなで過ごせることに感謝し、壁にぶつかったときにも立ちむかえるような強い人間になろうと思います。

私が考えた「平和」

第三小学校 六年

三 善 優 花

私は、夏休みを利用して、明治史料館の「聞いて・みて・考えよう 私達が住む町の戦争のこと」に参加してきました。沼津の戦争史跡をみに行き、空襲を体験した人の話を聞き、戦争中に食べたという「いとん」も食べさせてもらいました。

そして、私が一番に感じたのは、
(平和って、何だろう。)

という事です。

「平和」を辞書で調べてみました。

- おだやかに、やわらぐこと。
- 戦争や暴力で社会がみだれていない状態。

「平和」には、心の平和と、社会の平和があるのだと思います。

家族と一緒に居られること、学校で友達と勉強できること、あなたが毎日眠れること、おいしいご飯を食べられること…。全部、私から七十六年前、その当たり前のことができなかった時が、本当にあつたなんて信じられませんでした。でも、本当にあつたのです。

昭和二十年七月十七日、沼津大空襲があつたそうです。九千八十個

の焼夷弾が投下されて、二百七十四人も人が亡くなり、五百五人の人がけがをしたそうです。沼津の町の九割が焼けてしまい、私が見ている風景が何も無くなってしまった時が、本当にあつたのです。

沼津大空襲で足をなくしたおばあさんの話を聞きました。沼津の町中が燃えている中で、みんなが泣き叫びながら逃げ回り、道にはけがをした人がたくさん倒れていたそうです。こんなに平和と正反対の時が、本当にあつたのです。

私は、平和な時代に生まれてきたけれど、町に残された戦争の跡や、このおばあさんの話を絶対に忘れません。今の平和を、当たり前だと思つてはいけません。この平和がずっと続くように、守つていくことが大切だと思います。

学校の授業で、SDGsを習いました。日本だけでなく、世界で目指す目標です。十七の項目の中で、平和が関係するものが十個もありました。平和でなければSDGsは達成できないと思います。私たち一人一人の心が平和になれば、世界のどの国も今よりもっと平和になれるはずです。大きな平和のために私ができることは、本当に小さな事かもしれません。でも、私はいつも平和な心でいられるように努力したいと思います。そして、私の周りの家族や友達にも、心の平和が広がってほしいです。小さな平和が集まれば、きっといつか大きな平和につながると思います。

世界の平和

第三小学校 六年

渡邊 夕月

私は戦争を体験したことがありません。なので、はげしい戦いだっ
た戦争のことを私はまだあまり知りません。ですから、私はこの平和
作文で戦争のことをよく知ろうと思います。

まず、私が目をつけたのは核兵器です。日本では広島と長崎に核兵
器がおとされました。使われた核兵器が、多くの人々にまで被害をも
たらしました。

ですが、核兵器などの被害がおよんだのは日本以外にもあるのでは
ないか、そう思って調べてみました。

すると、思った通り、ほかの国にも「ヒバクシャ」がたくさんいる
と分かりました。例えば、ソ連による核実験が約四百七十回も行われ
たセミパラミンスクというところには、百万人以上のヒバクシャがい
るとして、予想以上に不安な気持ちになりました。

このほかにも、核実験が行われた南太平洋の島々などでもたくさん
のヒバクシャが生まれたそうです。爆発をとまなう核実験は禁止され
ましたが、今はレントゲンの光を受けすぎたりするとがんになる可能
性もあります。そのため、今後もし少しづつですがヒバクシャは増えて
いくと不安に思います。

次に今戦争中の国はどれくらいあり、どのような戦いをしているの
か調べてみました。世界百九十四カ国のうち二十四カ国もの国は今も
まだ戦争をしています。日本は、私が生まれる前に戦争が終わってい
たので、私は心の中で日本が安全ならそれでいいかなと思っていたこ
ともありました。ですが二十四カ国の中に日本人が住んでいるかもし
れません。日本が戦争している時、外国人の人々にも被害がでたと思
います。外国の戦争は日本に被害は及ばないかもしれませんが、かつて
日本であった多くのぎせい者がでたような戦争が外国で今も続いてい
ると知って、私はけっこう無責任な考えをしていたんだと思います。

さらに、今の外国の戦争は、実際に殺し合いをすることがなくても、
スパイが情報を盗んだり、破壊工作したりすることがあるそうです。
戦争をしている国の中には内戦をしている国もあります。今、戦争や
内戦をしている国は四十五カ国もあるそうで、なんで国の中でまで戦
争をしているのか不思議に思いました。

全世界の国が和解するにはどうすればいいのか。私はまず外国の人々
と話し合いをして少しでも理解してくれる人がいれば、和解できる一
歩につながって、平和になっていくのではないかと私は思います。

語り伝えていく戦争

第五小学校 四年

内藤留衣

私のおじいちゃんは、戦争経験者です。

一九四五年、まだ五才の小さな子どもだったおじいちゃんは、沼津市幸町の、第四小学校東側にある、か野川沿いの家に家族五人で住んでいました。その家には、十五人ほど入れる大きな防空ごうがあったそうです。

戦争がひどくなると、アメリカのB-29という飛行機が毎日飛んで来ては、ばくだんを落として行きました。おじいちゃん達家族は飛行機が飛んで来る度に、防空ごうに近所の人達と一緒にかくれていました。時には、か野川にもぐってかくれたこともあったそうです。

そんな生活がしばらく続き、おじいちゃん達家族は、岐阜県郡上郡ぐんじょうぐん白鳥町しろとりちょうにそ開しました。沼津駅からじょう気き関車に乗って行ったそうです。

その三日後の七月十七日午前一時ごろ、沼津大空しゅうがあり、沼津市はやけ野原になってしまいました。

一九四五年八月十五日に戦争が終わりました。おじいちゃん達家族もしばらくして沼津にもどって来たそうです。けれど、自たくはやけてしまっていたので、第五小学校区にある今の家がある場所に引っこ

して来ました。おじいちゃんによると、ここは「海軍工しゅう」という軍じゅ工場で働く人達の宿しやだったみたいです。沼津駅から根方街道まで、建物がほぼ全部やけてしまって、見渡せたと書いていました。

戦争は終わったけれど、おじいちゃん達家族にとっては戦後の方がつらい生活でした。食べ物無く、農家に買いに行ってもさつまいもは売ってもらえず、さつまいもの葉しか手に入りません。なので、さつまいもの葉を煮た汁を飲んでいたと言っていました。

お米が無いので、秋にはイナゴを取って食べたり、どぶ川からアメリカザリガニを取って食べたりしたようです。

第五小学校に入学して給食が始まると、コッペパンとまずいだったしふんにゆうが毎日出ました。一日の食事がそれだけになることもありました。

それに、戦後、家族が病気にかかり、治りようにお金がかかるので、このびんぼうな生活は数年続きました。今は食べ物がたくさんあって平和な毎日があたり前なのに、戦争のせいでこんなにまずい生活をしていたなんて、今の私には考えられません。毎日お腹を空かせていたおじいちゃんがかわいそうです。

私はむやみに人の命をうばう戦争を無くしたいと思いました。そのためにも、たくさんの人につらい思いやこわい思いをさせた戦争を、次の世代にも語り伝えていくことが大切だと考えます。最近、戦争を経験した人が高れいになって、戦争を語れる人が少なくなっているとニュースで見ました。だから、私はおじいちゃんから聞いたこの話を、

自分の子どもや孫にも伝えていきたいと思えます。

これからも平和な毎日が続きますように。

平和になるために

第五小学校 五年

大宅 心 奈

世界が平和になるにはいろいろな何かを変えていかなければならないと思えます。それはたくさんあるけど、わたしは主に戦争だと思えます。戦争は多くの場所で今もやっています。この戦争をなくすにはどうすれば良いのか考えてみました。

そもそもなぜ戦争が起こるのかを調べました。その一つは民族の争いです。なぜそのようなことで戦争が起きるのかというと民族の異なる人たちがその考えのちがいがいから争いを起こすことがあるからだと思います。考えがちがってもほかの人のことを受け入れるのはとても大事だと思います。おたがいのことを受け入れ合ったらいやな気持ちになることもなくなります。それにはやってくれないとやらないという考えじゃなくて自分達からやるという考えを大事にしたいと思えました。それは戦争のことだけじゃなくて身の回りのことにも言えます。例えばけんかです。けんかは小さな戦争のようなものです。戦争は何かと何かがつかりあって起こります。けんかも同じでかた方が

いやなことを言ってももうかた方がやさしくなればけんかは起こりません。だから世界中のみんながやさしくなれば戦争も起こらないはずなんです。そうするためにそのような取り組み（活動）などをして戦争をなくせばいいと思えました。今からでも間に合うので自分達でこの世界をより良いものになりたいと思えます。

他にも宗教の争いや資源の争い、政治や領土の争いなどが起きます。でも冷静になって考えれば解決できることかもしれません。そうするとはり合うこともなくなって人にやさしく接することができると思えます。

ほかに最近新聞を読んでソマリアという国からどく立してできたソマリランドという国を知りました。一九八〇年代にソマリアの内戦が始まったそうです。アフリカでは国の中で国民どうして争うのはよくあることだそうです。その時ソマリアの北部地域がソマリランドと名乗りソマリアからの脱退とどく立をせん言したそうです。でも通常ならここで支配けんをめぐって新たな内戦が起きてしまうそうです。すがソマリランドでは、氏族の長老達の話し合いで解決したそうです。すごいなと思えました。戦争を回ひしただけじゃなくて議会の設置や大統領制のどう入など民主主義の仕組み作りを進めていったそうです。その後、ソマリランドは国民投票によってけん法も制定し、立派に国家としての体さいを整えたそうです。

国民の投票によってけん法を決めたり民主主義の仕組み作りを進めたりするところに感心しました。わたしはこれからけんかなど何かあったときは話し合いで解決したいです。

いつか戦争がない平和とよべる世界が来ることを願っています。

争いのない世界

第五小学校 六年

室 伏 彩 名

私は、戦争がおこる事は悲しいと思います。なぜそう思ったかという、人と人が殺し合ったり、食料が不足して栄養が足りなくなったり、たくさん人が亡くなるからです。命は、一人に一つしかない大切なものです。

私は、今年の六月六日に祖母を亡くしました。亡くなる前、家で二週間ほど祖母を家族で看護しました。祖母は病気でだんだん弱っていき、つらくて苦しそうでした。そんな祖母を見て自分は、涙が出て悲しかったけど、最後まで祖母を看護することができたので、そこで命はどれだけ大切なものかを知ることができました。

日本では原子爆弾が二回おとされました。一つは、広島で、もう一つは長崎です。この核兵器で、それぞれ十四万人以上、七万人以上の人が一瞬で亡くなってしまいました。私は、祖母の一つの命を失っただけで、悲しくて苦しいのに、原爆で数えきれないくらいの人たちが亡くなってしまい、その家族、友人、周りの人たちがどれだけ悲しかったのか私には想像できない位辛いことです。

では、戦争をしないためにはどうしたらいいのか自分なりに考えてみました。私は、妹の気持ちを考えないでケンカをしてしまうことがあります。そこで私は、ケンカが戦争につながるために、まず相手の話を聞いて、その後自分の気持ちを伝えられればケンカをしても、おたがい仲よくすることができると思います。ケンカなどしたときは、おたがい話しておたがいの気持ちを理解できれば戦争はなくなると思います。人の気持ちのことを考えたり、意見を出して私を知ってもらったりすることは、いいことだと思いました。

次に、暴力や武器で争わないためにはどうしたらいいか考えました。今年の夏に開きされたオリンピックをテレビで見ると色々な国の人が競い合い勝っても負けてもおたがいをたたえ合う姿を見て素晴らしいと思いました。スポーツで競い合えば人が死んでしまうことやいろいろな人が悲しまずにいられることができます。

私は、四さいから水泳をやり始めました。毎日練習しているけど、おこられてしまうときがあったり、年下にタイムをこされたりして、イライラしてしまったり涙を流したりすることもありました。でも、私は大会で友人が自分より速いタイムを出すや友人のことをおうえんしたくなるし、自分もがんばろうと思えるから、スポーツで競い合えば、自分自身も成長できるし、周りの人もおうえんして、認め合うことができるからスポーツで競い合うのは、いいと思いました。そして、スポーツで競い合うのはみんながいるからできることなのです。スポーツでいろんな国の人とこうりゆうすれば、戦争で争うこともなくなると思います。

平和と戦争

大岡小学校 六年

長倉七羽

戦争と聞いて、私は考えた。戦争とは、たくさんの人々が死んでてもおそろしく、こわいものだということしか分からなかった。

私は、父に「戦争とはどういうものなのか」をたずねてみた。父は、第二次世界大戦の話聞かせてくれた。

「第二次世界大戦は、日本の食料が少なくなり、外国から食料をうばおうとして起こった戦争なんだよ。」

私はとてもおどろいた。なぜなら、私は日本が一方的に攻められていたと思っていたからだ。けれども、その食料を運ばなくしていたのは、外国の方だった。だから、日本は食料をうばおうとしたのだ。

父が私に質問した。

「七羽だったら、どうする。」

私には家族や友達がいる。その人達を守るため、食料を確保するためにどうしたらよいか考えた。考えたが、答えは結局出てこなかった。

答えが出なかったのは、自分が幼く、ただ未じゅくなだけかもしれない。けれども、昔は戦争の道しかなかった。そのことに、私はショックを受けた。

そんな私に、父はこう言った。

「日本の人達は、食料を求め、戦争をした。ただ土地を求めてやってきた訳ではなかったんだよ。そして、そこには家族を守るという意志があったんだ。」

つまり、戦争へ行っただ人達や政治家達は、一人一人国のため、家族のためという「正義」があったわけだ。この正義のために戦ってくれた人々に感謝を今一度、思った。

けれども、戦争に行き絶対に戻ってくるとは限らない。残された家族、人々のことを考えてほしい。

戦争とは、している時はとても苦しい。戦争が終わった後は、もっと苦しい。

私は、戦争の先に幸せや平和があったとしても、何があっても絶対にやってはいけないことだと強く思う。幸せや平和は、家族や友達があつてこそのものであり、今ある幸せをしっかりと胸に刻んで生きていきたいと思った。

この夏初めて考えたこと

愛鷹小学校 五年

山澤千尋

これが戦争か…

と私はため息が出ました。

私はこの夏、戦争のえい像を二つ見ました。沖繩と広島・長崎についてです。わすれられないえい像は、ひどいやけどをしている人たち、道ばたにごろごろ死んでいる人たち。その中にはまっ黒くげになつている人のえい像もありました。私は、こんなえい像を初めて見ました。こわくてわすれられません。

沖繩戦では、アメリカ軍が来て、つみもない住民たちにはぐだんを落としたり、火炎放射器という道具で焼いたりして、見ていて本当におそろしかったです。広島・長崎に原爆が落とされたことは知っていたけれど、そのきのこ雲の下で実際にどんなことが起こっていたかということは初めて知りました。その人たちの苦しみを考えると、私はたまらない気持ちになりました。

(どんなに苦しかっただろう。なぜ人間が人間にこんなことができるのだらう。)

私は思いました。もし自分だったら、自分の家族だったら……と考えると、とても悲しくなりました。

私は、アメリカはひどいと思いましたが、アメリカは、日本に対して恨みを持っていたのだとそのえい像の中で言っていました。「やられたことはやり返す」「恨みは倍にして返す」それが戦争なのだなと思いました。そんな考え方は終わりがなくてこわいなと思いました。

今年、東京オリンピックがあります。開会式も閉会式も家族で見ました。どの国の選手も笑顔で楽しそうで、会場全体が一つになって感じるがして、見ている私も楽しくなりました。競技の中では、いろいろな選手が気づかい合ったり、助け合ったり、たたえ合ったりす

すがたが見られました。国がちがつても、勝つても負けても、おたがいをみとめあつて仲良くできることが、私はとてもうれしかったです。オリンピックは平和の祭典と言われますが、本当にそうだなと思いました。こんな平和な場面を見ると、昔戦争をしていたなんて信じられない気持ちになりました。

昔、なぜ戦争をしていたのか、その理由はまだ私にはわかりません。今の私たちと同じように、ふつうにくらしていたつみのない人たちが、なぜ死んでいかなければならなかったのかも分かりません。それは、これから勉強をしていくとわかるのかもしれない。でも、どんな理由があつても、一人ひとりの人間の命を大切にしない戦争は絶対にはいけないことだと思います。人の命はみんな平等です。上も下もありません。強いも弱いもありません。

沖繩のえい像の最後に、「何があつたかを知ってください。学んでください」と書いてありました。戦争を体験した人たちはみんな年をとつて、だんだん戦争のことを伝えられる人がへつていきます。自分たちが今伝えておかなければと、思い出したくないことを思い出し、伝えてくれているそうです。戦争の話はこわいけれど、私たちはしっかりと聞いておかなければいけないと思います。今はインターネット上にも戦争体験の話があります。毎年夏になると戦争の番組がやっています。本で読むこともできます。自分ができる形で、戦争とはどんなだったのか、知っていききたいです。みんなが戦争のことをくわしく知って、こんないやだ、二度とくり返したくないと強く思うことが、平和な世の中を作っていくことにつながるのだと思います。

広島の被ばく者から聞いた話

大平小学校 四年

小河 宏

夏休みが始まってすぐに、ぼくは広島へ連れていってもらった。『コロナが流行しているからだめだ。』と言われたが、ぼくは、どうしても行きたかったので強くてのんで連れていってもらった。

原ばくドームで写真をとっていると、自転車に乗って来たおじいさんがぼくに話しかけてきた。

「君は何才ですか。」

ぼくは

「十才です。」

と、答えると、そのおじいさんは、

「ぼくは、君と同じ年に原ばくにあつたんだ。ぼくはその時お母さんの実家に行っていたので、原ばくの強い被害は受けなかったが、よく心地に近い所にあつたぼくの家は、熱風でやられ、お母さん、二人の姉さん、姉さんの赤ちゃんを一気になくした。お母さんと一人のお姉さんは、今も行方不明だ。ぼくは、おばあちゃんに育てられた。食べ物がないで苦労したよ。近所の大人からすすめの取り方を教わり、それからすずめをよくとり、羽根をむしって焼いて食べたよ。食べ物を選ばなくてできなかつた。生きて行くためには、自分

で食べ物をさがさなくてはならなかつたよ。」

ぼくは、おじいさんの話を聞いて涙が出そうになった。ぼくと同じ年にお母さんと二人のお姉さんを失いそれだけでも悲しいのに、自分で食べ物をさがす。好ききらいなど言っていられない。生きるために必死だつたと思う。それに比べぼくは、好ききらいばかりだ。

そのおじいさんは毎日原子ばく弾の落とされた八時十五分にいれい塔にお参りに行き、その帰りに原ばくドームの近くで、すずめにえさを与えるのが日課だそう。すずめにえさを与えるのはすずめに命を救われたので、その恩返しのためで与えているとの事だつた。

たつた一発の原子ばく弾で広島町の町がメチャメチャにこわされ、多くの人の命をうばつた。幸せな家族の生活も一しゅんにしてこわされた。戦争が終わつて七十六年もたつているのに、今もまだ原ばく病（がんや白血病など）に苦しめられている人が多い。このおじいさんも二度もがんの手術をしているらしくそのきずあともみせてくれた。とても痛々しかつた。

世界中には核保有国がたくさんあり、現在も核兵器が作られている。今の核兵器は、広島へ落とされた原子ばく弾よりさらに力が強く、数百発で地球の形が変わり、もとにもどすことができないとも言われている。おそろしいことだ。核兵器なんてこの世の中には必要ない。地球上のだれもが安心して、楽しく平和でくらす世の中がずっと続くことを願っている。ぼくは広島へ行き被ばく者や原ばく資料館を見学してなおさら、強く感じた。いつまでも平和でありますように。

戦争はダメ。

大平小学校 五年

大井 美乃里

わたしは、戦争は絶対にしてはいけないと思います。なぜなら、いろいろな人が悲しんだり、国と国の仲が悪くなったりするからです。

第二次世界大戦では、広島県と長崎県に原爆が落とされました。そこでは、多くの人がひ害をうけました。わたしは、そこで、原爆を落としていいことがあるの？と思いました。そんなことをして、多くの人をころして、戦争に勝つてよるこんでいるなんて考えられません。自分の国は勝つてうれしいかもしれないけど、その相手の国には苦しんでいる人がいっぱいいて、みんなくらい気持ちだということを一度考えてもらいたかったです。

ぼくさんが落ちただけではなく、ぼくさんが落ちたあとに黒い雨がふりました。ぼくさんで行ったすなが落ちてくるので、黒い雨といわれています。黒い雨には放しや線がふくまれている、これをあびた人は今でも苦しんでいます。今でも苦しんでいるということは、長年ずっと苦しんでいるということだから、本当につらいだろうなと思います。広島県と長崎県だけではなく、東京都などにもぼくさんが落ちました。だから、この戦争は日本全体で苦しんでいるということです。

このときは、日本も平和じゃなくて、少しのことで人をころしたり、法がしっかりしていませんでした。けれど、この第二次世界大戦で日本が大変なことになってしまったので、みんなしっかり学習して、戦争はダメなことだと知ってしっかり復興していき、平和へ向かってきました。

苦しんでいる人は助けたり、国と国で仲良くしたりして、今この日本は平和で守られています。日本は平和でも他の国では今でも戦争をして苦しんでいる人がいます。そして、お金がなくて苦しんでいる人や、未だに昔のように少しのことでもころしたり、自由な行動ができない人がたくさんいます。このような戦争や苦しんでいる人がいなくなつて、みんなが自由に楽しい毎日が送れるように、やさしい心で支え合つて、苦しんでいる人がいたら助けてあげたいです。

ぼくが聞いた戦争

大平小学校 五年

大村 柊 登

ぼくは、「この世界のかたすみ」というドラマを見て、戦争中の生活の貧しさにおどろいた。戦争中の生活についてもっと知りたくなつたため、九十才のひいおばあちゃんに話を聞くことにした。

ぼくのひいおばあちゃんの父親は職業軍人だったので、中学生のこ

る家族全員で満州に引っこしたそう。満州は日本とちがつて、空しゅうを受けなくて平和だった。しかし、一九四五年八月九日にひいおばあちゃんが弟たちと遊んでいたら、

「ヒュー。」

と音がして、旧ソ連からのこうげきを受けた。急いでにげる準備をして、その日のうちにトラックで駅までにげた。そして、列車で南の方ににげた。しかし、列車に乗っている間も

「ヒューダダダダダ。」

という音といっしょに空ばくを受けた。やっとの思いで「とんか」という場所について、そこで終戦のラジオを聞いた。でも、その後も旧ソ連兵に飛行場の格納庫に集められ、一週間かけて山の方においだされた。その道中で、お母さんのせなかにおんぶされていた赤ちゃん全員が亡くなってしまった。話していたひいおばあちゃんも、その時のつらさを思い出したのか泣いていた。赤ちゃんがせなかで死んでしまうことが想像がでさなくて少しこわくなった。山でも少しの間生活をしたそうだが、寒くなるのでまた南の方ににげた。そしてその一年後、日本に帰れることになったそう。

ぼくは、ひいおばあちゃんが満州から日本に帰って来たことは知っていたが、終戦後すぐに帰って来たと思っていた。まさか、帰るまでの一年でこんなにつらい日々を送っていたとは思ってもみなかった。それに、ぼくは話を聞いただけでもこわくなった。それを、ぼくのひいおばあちゃんは十五才で経験した。この時代だからしょうがないという問題ではない。そのほかにも原ばくや、東京大空しゅう、赤紙の

召集など戦争がなかったら、すぐえる命がたくさんあった。

ひいおばあちゃんは、

「戦争なんて一つもいいことはない。」

と言った。つらい思いをしたひいおばあちゃんの言葉は重かった。ぼくたちは昔日本に起きた戦争を軽く受けとめてはだめだ。平和にすぐし続けている今を守っていきたい。

「原爆と人間」の パネル展を見て

大平小学校 五年

金 枝 真 桜

「原爆と人間」のパネル展が市立図書館であった。親せきのおばさんと見に行った。

私は、二年生の時に広島島の原爆平和資料館に行ったことがある。その時はまだ小さかったので、写真や展示物を見ても、

「わあボロボロ。」とか「わあ！すごい！」とか「わあ気持ち悪い」

とかその程度しか感じなかった。原爆さえよくわかっていなかった。

市立図書館で見た写真は、その時よりずっと少なく、ひどい光景のものはあまりなかった。しかし、私は一枚の写真を見てとてもつらく悲しい気持ちになった。それは七、八才の男の子が死んだ赤ちゃんをお

んぶして、火そう場にやって来て、直立不動の姿勢で立っている写真だ。胸がはりさけそうに痛んだ。私よりずっと年下だ。この男の子の両親は原爆で亡くなったか、来られない事情があり、泣く泣く死んだ赤ちゃんをおんぶして来たのだろう。こんな小さい子が一人で火そう場に来るなんて、とてもかわいそうで気の毒に思った。

原爆によって、この子は幸せな家庭を一しゅんにこわされ、どん底の世界につき落とされてしまった。この赤ちゃんの人生も、男の子の人生も、お父さん、お母さん、その他の兄弟の人生も、一気にふっ飛ばされてしまった。そう思ったらつらくて悲しくなってきた。

世の中には悲しいことやつらいことは山ほどあるけれど、こんなにつらいことが、他にあるのだろうかと思った。

私はこの写真を見ながら、この男の子は元気で大人になったかな。途中で原爆病にかからなかったかな。今でも元気でいてほしいなあと考えた。

七十六年前に広島や長崎に原爆が落とされ、数十万人もの命が一しゅんのうちにうばわれてしまった。七十六年たった今でも、原爆病と戦い、入院生活をしたり、通院生活を送ったりしている人も多いと聞いている。その人達は七十六年間どのような生活してきたのだろうか。原因が自分がないのに、原爆はうつるとか、熱風によるやけどのため、皮ふがくっついたり、結婚したくても（あの人は原爆病だから）と言ってさげられたり、生きていても差別で苦しい日々を過ごしてきただろうなと思った。

たった一発の原爆が今もなお、広島や長崎の人々を苦しめている。

身体だけでなく心も傷つけている。本当におそろしいと思う。

今では、地球上の人間（約七十億人）を五回六回も殺すことができ核爆弾が、全世界にあるそうだ。原子力を人間を殺す材料としては絶対に使ってはいけない。原子力の巨大な破かい力によって町が焼き尽くされ、罪のない市民が殺され放射線を浴び、何十年も苦しめられる生活は、あつてはならないと思う。世界中の平和がいつまでも続いてほしい。

戦争の怖さを知る

原小学校 六年

佐藤澄 怜

一九四五年に、広島と長崎に原子爆弾が落とされ、第二次世界大戦は終わりました。この戦争は、一九三九年から六年余り行われた主に日本、ドイツ、イタリア対アメリカ、イギリス、ソ連で戦った戦争です。日本は、戦争でこの二つの原爆を落とされ、降伏しました。原爆の死者は合わせて五十万人以上もいるのです。

私は九カ国がそういった核兵器を持っていることを知り、これから多くの死者が出てしまうと思いました。戦争がなくなり、核兵器を持たない平和な世界を作るために私達が行うべきことは何なのか考えてみました。

大切なのは、戦争のおそろしさを伝える事だと思えます。元々、私

も小さいころは戦争を知りませんでした。だけど、授業やニュースなどで、戦争や原爆の事を知り、こんなにたくさんの方の命をうばってしまうなんて怖いと感じました。日本はもう戦争しない事にとても安心したのです。私より年下の子が私のように戦争の怖さを知り、戦争の無い今は平和で幸せに暮らせる事に感謝してもらいたいです。そうすれば十年後、二十年後の大人は戦争は絶対にしないとあります。

広島に原爆が落とされ、多くの人々が亡くなった八月六日は毎年平和記念式典が行われます。式典には小学生も出て、強い平和への願いを持って行動する誓いをします。誓いは色んな人の心に届き、感動させるのです。私は、日本だけでなく国境をこえ、特に、今も戦争をしている国の人の心に小学生の誓いが届くと良いなと感じました。

他にも戦争経験者や大切な人を亡くした人が自分の苦しみや辛さを後世に伝えるための活動を行っています。このような活動や式典が未来へとつながっていくと思います。怖さを知ると同時に今は家族や友達と過ごせたり、当たり前の日常を迎えられる事が幸せなんだと多くの人に思っしてほしいです。私たちも伝えられた苦しみを伝えていかなくてはならないと思いました。

今の生活と昔の生活はまったく違います。今のよう自由で遊んだり、家族と一緒にふとんでねたりする他、昔は食事もしろしかりません。殺されてしまう前に病気になるって亡くなる人もいたそうです。調べていく内に生きてるだけで幸せなんだなと思ってきました。戦争を忘れずに今ある幸せを大事にし、一日一日を大切に過ごしていきたい

いと思えました。

国をこえろ！

浮島小学校 五年

落合王遵

「ピカ、ゴロゴロゴロゴロ。」

すさまじい音と地響きがする。原爆を落とされた。みんなは防空ごうに入り、原爆が鳴り止むのを待った。『はだしのゲン』の印象的な場面だ。

原爆というのは、全く罪もない人を殺す悲んな爆弾だ。原爆のせいでだが焼けただれてしまっていた。指を少しやけどするだけですが痛いのには、はだが焼けただれてしまうなんて、正直ぞつとしてしまう。

戦争というものは、むやみに人を殺し、思い出をどんどん消し去ってしまうとんでもない方法だ。

では、なぜ戦争が起こってしまうのだろうか。今、日本がかかえている問題は、北方領土問題、せんかく諸島問題、竹島問題だ。

ぼくの今の気持ちは、

(本当は日本の島なのに、なんでロシア、韓国、中国が占領しようとしているのか。)

それが分からない。

せんかく諸島を占領しようとしている中国の言い分は、「中国が早く魚つり島を発見し、命名し、利用してきた。」

と、いうものだ。

次の、竹島を占領している韓国の言い分は、

「韓国には、竹島についての文書がたくさんあるから、自分達の国だ。」と、主張している。

最後に北方領土を勝手にうばい取ったロシアの言い分は、

「大戦の結果、ロシア領となった。」

と、強く主張している。

なんてことだ。クロムブックを使って調べた結果がこれだ。だが、向こうの国は国で言い分があるんだな。しかし、日本にとつたら、全く話し合いにもならない。日本の言い分とは正面から対立している。これで「よし、戦争だ。」ってことになるんだろうな。

いやいや、戦争をなくすために、日本（ぼく達）はどのような対応をしていけばいいのだろうか。

ぼくは、戦争というおそろしさを改めて日本人が知り、戦争というものはおそろしくてやってはいけないことだと思えば、日本人は戦争をすることをやめると思う。

そこでぼくが考えてみた、小学生でも始められる案は、二〇二〇オリンピックでやったように、各国の選手で競技を競いあってみるということだ。言葉が通じ合わなくても、同じルールで、楽しさ、辛さ、難しさを味わうことで、他の国とでもコミュニケーションをとれると

思う。

ぼくは、陸上競技をやっているので、オリンピックを見てみると、マラソン選手のしんどいところがすごくよく分かる。だから、日本以外の国の選手にも「がんばれ。」と声援をおくりたくなる。国をこえて応援したくなる。お互いを高めながら競い合っていく。世界新記録が出た時、（すごいな。）と思う。国をこえて応援ができる、国をこえて認め合うことができる、そんなオリンピックを愛していく心が、お互いを高め合い、世界を平和にしていけるのではないかと思う。

本当の平和とは

香貫小学校 六年

中 島 伶 音

戦争などの話をするとなんか誰かが言う「日本は平和な国だ。」平和な国に生まれてきて良かった。」と。その言ったなかには必ず平和という言葉が入っていた。

私は今まで平和とはなにかと深く考えたことがない。というか考えようともしていなかった。しかし、六年生になって本を読んだのがきっかけで、平和とはなにかと考えるようになった。

今までの私だったら、「日本は平和？」と聞かれたら必ず平和と答えていただろう。なぜなら日本は今戦争をしていないからだ。でも今の

私はそうは思わない。逆に、なんらかの事件があったり、自然災害などで命を失うこともあるのに平和と言っているのだろうかと思っただらだ。そう思うようになったきっかけは、二〇一六年七月二十六日未明におこった、戦後最悪な殺人事件のことがきっかけだ。この事件は多くの人の命が失われてしまった。その犯人は、障害者のなかでも話すことができない入所者を選んで刺し、「こいつらは生きていてもしょうがない。」という考えを持っていた。私はそのことをきいて生きていてもしょうがない人間なんかいないと思った。この事件は、多くの人がしょうげきを受けただろう。しかも日本は平和な国と思っていたのだから。

私はこの平和作文を書くにあたってある本を読んだ。それは、原ばくのことについて書いてある本だ。その人は長崎県に住んでいて、原ばくを長崎に落とされ、防空ごうに向かうときげが人も多く、さげび声やうめき声であふれていたらしい。しかも火のせいではなかなか進むこともできないで、死体もあちらこちらにころがり命がけだったそう。そして戦争が終わったある日、放射線をあびてしまったその人の兄は、永遠に帰らぬ人となった。私はその話をきいて、とつ然大切な人を失ってしまったらもちろん悲しいけど、その人たちは大切な人を私たちよりも多く失っていて、しかも原ばくが落ちるかもしれないきょうふ、今まで当たり前のように暮らしていたところが燃えるというすごく大変でつらい思いをしていただろう。だけど私は本で読んだだけで、実際どれだけかわかったかつかつらかったか苦しかったかは知ることができない。たぶん私が思っているよりもつらいだろうし苦しいだろう。で

も、そういうことを体験した人は今の日本は平和だろうと感じると思っただ。

私はまだ本当の平和はわからない。でも、いろいろな人がいるからいろいろな意見があるだろう。だからたぶん日本を平和にしていくのはそう簡単ではないだろう。日本を平和と言っても誰かにとっては平和ではないこともあるだろう。だからみんなで本当の平和をみつけたらと思った。

ガラスの梨

門池小学校 六年

藤島 妃那

あたたかな日常が自分たちとは無関係のことでこわされたらみなさんはどう思いますか。とても悲しくつらいことだと思えます。戦争中はそんな思いをする人が何人もいました。この本では、戦争の中をたくましく生きぬいた少女が出てきます。

この時代、日本は中国だけでなくアメリカとイギリスに戦争をしかけました。そのせいで何人も男性が兵隊として戦地につれていかれました。少女の兄もその一人でした。もし、家族の誰かが危険な場所につれていかれそうになったら、私は必死で止めると思います。しかし、この時代ではお国のために戦う兵隊はとても名よなことだとされ

ていたので、止めたり、泣いたりすると自分の命があやうくなりました。戦地で戦い、戦地で死ぬのが名よだなんてまちがっていると私は思いました。

結局、少女の兄は帰らぬ人となり、戦地で亡くなりました。いつも優しくて大好きだった兄が亡くなる。少女にとって悲しくつらい知らせだと思いました。

残された人も、苦しい生活の中兵隊のために物資などをわたさなければいけない日々。毎日のようにひびくサイレン。いつもけいかいしてすごさなければ自分や家族が死んでしまうかもしれない。そんな不安をせおって生きるなんてとても大変だと思います。

そして昭和二十年の夏。やっと戦争がおわりました。何人ものぎせい者を出した争いがおわたのです。

今年で戦後七十六年になります。今の日本では、戦争経験者が減っており、戦争の恐怖を知らない若い世代が増えています。私もその中の一人ですが、この本を読んで戦争中に生きる苦しみや家族や親類を失う悲しみをより深く知ることができたと思います。戦争とは、大切なものをうばうばかりで何一つ得られるものがありません。もう二度と戦争なんておきてほしくないです。

これからも、日本が平和であり続けるために、戦争や平和について国民一人一人が考えていけたらいいなと思います。そして、この平和な日常がいつまでも続いてほしいです。

嵐のような戦争

今沢小学校 四年

木山大雅

ぼくは、戦争のことなんて何も知りませんでした。授業で学習をしてちょっとだけ知ることができました。ぼくは、戦争が起きていた時に生きていたらきつとこう思っていたはずですよ。

(ぼくにできることはなんだろう。)

当時の子どもは平和な日が早く来てほしいという思いをもって働いていたと知りました。ぼくは、平和という言葉が簡単に口にしていましたが、そんな簡単なものではないんだなと思いました。戦争に行つた男の人は、自分が生きのびる確率はかぎりなく0に近いのに、国のために男のプライドを見せていました。女の人は少ない材料で料理を作つて子どもにご飯を与えたり、工場で働いたりしてはいけません。そのような不自由な生活をしていました。

戦争は国と国同士が戦うため、地球に平和がないじょうたいです。じゅうのたま、たった一発だけでも平和がこの世からさるのです。だからじゅうは危険なのです。使い方を間違えると世界がほろぶかもしれません。とてもおそろしい物です。だから、危険なものはあつかつてほしくないです。

つぎに、ぼくは今までなぜ自えいたいがあるのか知らなかったけど、

やっと分かりました。平和をつくり、そして平和を守るために自えたいはいるのです。ぼくは今、まだ平和を完全に成しとげたとは言えないと思っています。だから、ぼくたちがしつかりと昔の人達の思いを受けついで完全な平和にしていかなくてはいけないと思います。きつと昔の人は日本という国を守りたいという気持ちではだれにも負けないうぐらい強かったと思います。ぼくは、二度と戦争が起こらないことを強く、かたく信じています。だから、今の平和を大切に、今の自分達の命を大切に、ぎせいになった人達のために、ぼく達のできることを全うして活動し、平和を守り続けていきたいです。

まず小さなこととして、困っている人を助けたり、人のようぼうを聞いて、できることをしてあげたりしたいです。また、相手の気持ちになつて考えてあげることもだいじなので、自分の事ばかりゆうせんしないで、すごしていきたいです。一人一人が相手の事を考えやさしくすることができれば争いはぜつたいに起こらないと思います。だから、みんなで力を合わせて、幸せなくらしをすることができるようになつたらいいなと思いました。

幸せな平和

今沢小学校 五年

前田 葵 依

平和なこと

家族といっしょにいること

友達と遊ぶこと

ごはんを食べること

勉強ができること

好きなことができること

おでかけに行くことができること

けんかをして仲直りができること

当たり前前の生活ができること

「ドーン ドカーン」

ぼくだんが落ちてくる

平和な生活が

大好きだった町が

もえつくされている

いつもいっしょにいた家族が

亡くなっている

仲良しだった友達も

亡くなっている

食事もできず

勉強もできず

遊ぶこともできない

悲しい日々

くるしい日々

戦争はともおそろしい

わたしは平和なくらしが

できてよかった

この平和が

ずっとずっと続いてほしい

戦争は二度と起きてはいけない

この平和が

なくならないように

わたしもできることから

始めていきたい

知らなきやいけない事

戸田小中一貫学校 六年

石原 煌

八月十五日終戦記念日にぼくは戦争について話を聞いた。今ぼくが生活している毎日からは、想像できない話だった。

何度も行っているハワイのパールハーバーでの真珠湾攻撃の話。今ハワイに行くとき快くむかえてくれるが、戦争のことを考えるとありがたい気持ちや悲しい気持ちになった。今パールハーバーにおいてあるミズーリ号が沖繩で日本に攻撃された時の話。戦死した日本人のたちにたいして怒りでいっぱいだと思うのに、その怒りをおさえ海に送ってくれたようだ。何でそんなにやさしい事ができるのに戦争がおきたのか。

そして、その時に自分から戦争に向かう人たちの気持ちはどんな気持ちだったのだろうか。

ぼくだったら何で行かないとだめなんだろうと思う。しかしテレビに出ている戦争に行った人は、

「その時は死ぬのはまったくこわくなかった。」

と言っていた。ぼくはそれを聞いて本当はこわかっただろうし、食べたい物とか、行きたい所、大切な物、家族にも会えない悲しさがあつたのではないかと思う。本当は生きたかったのだろうと思つた。

また、家族の気持ちはどうだったのだろうか。日本のためといつても行つてほしくなかっただろうし、生きて帰つてきてほしかっただろうと思う。

ぼくは戦争の話をはじめて聞いて二度と戦争をやつてほしくないしこういう事が昔おきたことをみんなが知つておくべきだと思つた。

今でも戦争がおきている国もある。どうして同じ事をくりかえしているのだろうか。もっと命を大切にしてほしいと思う。そのためには思いやりを持つたりこまっっている人がいたら助け合いたい。みんながそういう気持ちになつたら平和な世界になると思う。

ぼくたちがすんでいる日本だけではなく、世界のみんなが、平和で幸せにくらせる毎日がおとずれたら良いなとぼくは思う。

戦争のない平和な世界を

戸田小中一貫学校 六年

山口 ゆずか

私は、平和について考えてみました。

みなさんにとって「平和」とは何ですか。私が思う平和は、争いや喧嘩「戦争」がないことです。私は小さいころから、おばあちゃん、おじいちゃんのお話を聞くことが好きで、よくしゃべっていました。

そんな中でも一番聞いていたお話が昔のこと、戦争のことの話です。

戦争と聞いて、悲しい思いになるのは、自分だけじゃないと思います。今回私は、とあるニュースを見ました。駆逐艦「雪風」の元乗組員の、西崎信夫さんのお話を聞きました。

西崎さんは、海軍に入隊した時に母から、「死んでしまったらなんにもならない、必ず帰ってきなさい。」と諭されたそうです。

もし、私も同じようなことを言われたら、こわくなって気づかれないように逃げてみるかもしれないです。「死んでしまったらなんにもならない。」聞いてみると少し悲しくなってしまうけれど、なんだか命を大切にすると任されたような気がしました。私が思うに、「戦争に行つても生きて帰つてきて。」と言うメッセージだと思いました。

そして、西崎さんが乗っていた水上特攻部隊は出撃。国力差で圧倒的なアメリカ軍の攻げきに敵わない。西崎さんは、ふと思ひ出した「死んでしまったらなんにもならない」という恐怖が殺意に変わり、とつさに銃を無我夢中で連射していたそうです。そして、負傷している仲間を助ける時、力尽きてしまい助けられなかった命を思うと、七十六年経つた今でも、自責の念に陥るそうです。

私は、西崎さんのことを調べて思ったことは、戦争を体験した人みんなが今でも苦しんでいると思ひました。だから、私達ができることは、発信されている歴史を沢山知ろうとすることです。そして、私達が語り継がれた願いや、大切さを伝えていき平和に向かつてきずなを強くして、一人一人が安心して笑顔でくらせる平和な世界にしたいです。